



クスノキの前で記念撮影（平成7年8月）



広場の端にそびえるクスノキ

数日を過ごし、少し元気になって町に帰っていく。ちょうど夏休みに田舎のおばあちゃんの家を訪ねるような気持ちだろうか。

最初に参加した小学生の多くはすでに二十歳を過ぎていて、学生として参加した人たちは、社会人となり、母となっている人もいる。また私自身にとってもこの十年間は大きな意味のある、ときの流れであった。



野村少年自然の家

まつい・ひろみつ 松山東雲短期大学教授。専門は植物社会学、環境教育。近著「愛媛の人里野草植物図鑑」「四国の樹木観察図鑑」など。今は「愛媛の巨木」と「食べられる草や木」（いずれも飯抄）の編集に携わっている。

そして誰もいない気安さもあるって、独り言のように木と会話をした。

その「自然の家」の広場に一本のクスノキの大きな木がある。「みどりの伝置所」の数日間、クスノキはみんなの人気者となる。この木のそばで遊んだり、木陰で語ったり食事をしたり、時にはこの木に登ったりする。最終日にはこの木の前で全員が記念撮影をして、来年の再会を約束して解散する。

七月の雨の日、所用のついでに、一人で「自然の家」を訪れた。広場の端にクスノキが変わらぬ姿で待っていた。



木と人間 12

木と再会する

松山東雲短期大学

松井 宏光

Hiromitsu Matsui

野村町惣川は四国カルストの麓の山村だ。過疎化と高齢化がすすむ山奥の集落だが、美しい風景と親切で純朴な人々が暮らしている。この集落の高台にある「野村少年自然の家」（旧野村町立天神小学校）を利用して、毎年、八月の数日間、「みどりの伝置所」が開かれている。

このイベントは地元の若者たちが、「惣川の自然を舞台として子どもたちに生きているうえで大切なことを伝えていこう」という目的で企画したもので、毎年二十〜三十名の小中学生が参加する。私は「自然を味わう」ワークシヨップを担当しており、川で泳いだり、魚を捕まえたり、森や洞窟の探検などの活動をしている。また小松山源之助さん（山口市在住のミュージシャン）が担当する「音と遊ぶ」ワークシヨップでは、竹で民族楽器を作ったり、「ジャンベ」と呼ぶ太鼓を使ってアフリカ音楽の演奏をしている。

このイベントは平成五年に開始され、今まで十年間続いているが、何年も続けて参加している子どもも多い。またボランティアとして参加した大学生たちは、社会人になってからも一年分の苦労話を抱えてやってくる。みんな、惣川の自然の中ののんびりした